

漆工第一年生甲組一人ノ學期試験ヲ行ヒ第二年生ニ進級ス

七月十三日特別ノ課程ヲ履修スルモノ左ノ三人卒業証書ヲ授與ス

三重縣平民竹内次郎 福岡縣土族廣川栄三郎 三重縣土族山崎鏡

八月機械体操場ヲ新設シ九月十一日ヨリ授業ヲ開始ス

九月九日本校規則第二十二條ニ據リ生徒中學業特ニ優等ノ者六人ヲ

選ヒ特待生トナシ本學年中ノ授業料ヲ免除ス

本年七月卒業セシ竹内次郎ハ東京市本郷區根津片町私立美術講習所廣川栄三郎ハ愛媛縣尋常師範學校山崎鏡ハ群馬縣桐生町山田高小學校右孰レモ同所ニ於テ現今畫學ノ教員タリ 本年末現在生徒ノ數ハ百八十九人ニシテ之レヲ細別スレハ普通科第一年生五十人普通科第二年生四十六人專修科老年生甲組二十三人乙組三十人專修科第二年生十一人特別ノ課程ヲ履修スルモノ甲組五人乙組十四人撰科生第一年九人撰科生第二年一人通計百八十九人皆自費ナリ之レヲ前年ニ比スレハ四十一人増加セリ

(道庁府県別各科現員一覽表、經費、書籍器械の項省略)

## 解説

### 1 校長代理

校長岡倉寛三は前年末に文部省より奈良地方へ出張を命ぜられた。本年一月八日帰京。

### 2 故小川松民

小川松民は明治二十四年五月三十日死去。翌六月一日葬儀が行われ、谷中墓地に葬られた。

### 3、4 後藤貞行出張、依囑製作

「職員辞令メモ」(前出)の明治二十四年四月二十七日の項に

教授高村幸吉ニ楠公銅像木型製作主任ヲ雇石川光明、山田常吉、後藤貞

行ニ全擔任ヲ萩原相吉、〔国吉山本瑞雲の誤りか〕小澤松五郎、山口豊藏ニ全助手ヲ命セラレ

とあり、楠公銅像の木型製作が開始された。馬の製作担当者となった後藤

貞行は馬のモデルを捜すために鬼首へ出張したのである。岡崎庄次郎(雪

声)が依囑製作の慰勞金を受け取っているのは楠公銅像の鑄造主任に内定

(正式任命は二十五年十一月九日)しており、また松方伯銅像(二十四年

依囑)の鑄造主任にも内定していたので、それらの準備作業を行っていた

ためである。彼は前年四月に本校雇となり、本年三月から美術工芸科金

工專修課程に加えられた鑄金授業を担当し、鑄金科開設(二十五年十一

月)準備をも進めていた。二十四年頃には本校敷地内北西隈の裏門あたり

に五十六坪の鑄物工場と七十坪の仕上工場が完成。依囑製作の鑄造や授業

が行われることになった。

西牧正八とはのちの林美雲(明治二十六年七月十八日改名届)である。

### 5 遠足

当時の新聞に次のように記事が載っている。

#### ○美術學校生徒の遠足

上野公園地の美術學校生徒百餘名は土曜日午前五時より該校を發し新宿停車場より甲武鉄道に乗り神奈川縣關西村に至りて玉川の勝地を跋涉し午後三時頃歸り來り會食ありて散解せしは五時頃なりし

(明治二十四年十月六日『郵便報知新聞』)

## 6 校友会発足

校内の親睦団体としては初めに菁々会があった。同会は校友会機関誌『錦巷雜綴』創刊号（明治二十七年四月）や岡倉寛三の日記「雪泥痕」（明治二十三年）などに名のみ登場し、その実体については未詳である。この明治二十四年十一月発足の東京美術学校校友会は生徒数の増加などに伴って新たに組織されたもので、会員は本校職員および生徒から成り、会長は本校々長を推すことになっていた。従って、岡倉が会頭となり、その指導のもとに活発な活動が開始された。主な行事は常会と年一回開催する大会で、ともに会員の作品展が行われ、賞が与えられた。第一回常会は二十四年十二月に、また、第一回大会は翌二十五年一月に開催されている。明治二十五年十一月二十七日『教育新聞』には「美術学校々校友会例会略評」と題して前日より開催の常会に展示された作品の短評が掲載されているが、これによると日本青年絵画協会展閉会後の校友会倶楽部で展示が行われ、絵画無慮二百余点（シカゴ、コロンプス世界博覧会出品物十二点を含む）、彫刻、漆工、金工等数十点が並べられ、盛会であったことがわかる。

岡倉会頭時代の校友会規則の完全なものは『錦巷雜綴』第四卷（明治二十八年三月）に掲載されているが（307頁参照）、それ以前の規則を記した菊蒔版印刷物断片が現存するので左に掲げる。

### （以上欠損）

- 第六條 役員ハ會長一人副會長一人及幹事七人常議員九名トス
- 第七條 會長ハ本校長ヲ推シ會務ノ総理ヲ乞フモノトス
- 第八條 副會長ハ總會ノ議決ヲ以テ職員ノ内一名ヲ推シ會長ヲ助け本會ニ関スル事務ヲ整理シ會長事故アルハ代理ス
- 第九條 幹事ハ會員中會長ノ指名シタル本校職員一名并ニ生徒ノ互選シ

タル代表者ヲ以テ成り會長及副會長ノ指揮ニ随ヒ庶務會計ニ従事ス

第十條 常議員ハ本會役員ヲ以テ之ヲ組織シ本會ノ常務ニ関シ許決ヲナスノ會トス

第十一條 副會長ノ任期ヲ二個年トシ幹事ノ任期ヲ一個年トス

### 會務

第十二條 本會ハ其主意ヲ全クセン為メニ常會、大會、講話會、遊技會、運動會ノ諸會ヲ開ク

### （欠損）

### 遊技會

第廿四條 遊技會ハ茶礼、插花、香、擊劍、柔術、弓術ノ六科ニ分チ會員ノ嗜好ニ應シ其一科若クハ數科ヲ修ムルモノトス

第廿五條 遊技會ハ本校課業時間以外ニ於テ各科ノ便宜ニ從ヒ之ヲ開ク其期日ハ都度幹事ヨリ之ヲ報スルモノトス

### 運動會

第廿六條 運動會ハ學校設置紀念日ニ於テ之ヲ開キ大ニ諸般ノ遊技ヲ演シ優等者ニ記念物ヲ贈與ス

### 會費

第廿七條 名譽會員ハ會費ヲ徴取セズ

第廿八條 會費ハ生徒老人ニ付毎月 錢トス

第廿九條 本校職員卒業生其他ノ會員ハ拾錢以上適宜其格ヲ定メテ之ヲ出金スルモノトス

### （以下欠損）

なお、発足当初に於ける活動項目には凶案の応需製作も含まれていたこ

とが左記の新聞記事によってわかる。

○圖案振興の良策 東京美術學校々友會にては今度普ねく世人の需に應し圖案の工夫を爲すこととなり左の如き書狀を所々へ配布せり

拜啓陳者本邦美術工藝品は年を逐て益巧麗を極め御同慶の至に御座候處其圖案に至ては往々不完全のものも有之或は趣致卑俗に流れ或は形質實用に遠かり精工の技術を盡すも既に本體を誤り徒勞に屬し損害を招くもの實に少からず殊に外國の需要に係る品類に於ては其弊最も甚しく相見へ候是等の病は適良なる専門圖按家少なき起因するものなれば他年其全國に普及するに及て消滅すへきものなるへしと雖も目下の缺乏を裨補するは亦肝要と存候當校々友會の儀は教員生徒の協同して美術の大成を希圖するの會に有之此際幾分か圖按缺乏を補ふの微志を致度存候就ては世の美術工藝家にて圖按を必須とする者の爲め依頼に應し金屬彫刻類、鑄物類、蒔繪類、陶器類、織物類の下繪を會員中に募集し本會圖案委員の審按により其優等のものを送付候様可致貴下には兼て美術上御配慮被爲在候儀に付自然圖按需要者有之候は、此旨御通知相成度其成績固より未だ完全を期する次第には無御座候へ共目下の急に應する一助と相成候は、大幸に存候早々敬白

明治廿四年十二月 東京美術學校々友會々員

黒川眞頼 加納夏雄 今泉雄作 橋本雅邦 川端玉章 高村光雲

巨勢小石 竹内久一 石川光明 久留正道 川崎千虎 狩野友信

海野勝珉 白山福松 岡崎庄次郎 結城正明 大島勝次郎 後藤貞行

山田常吉 伊東 貞 四牧正八 杉浦瀧次郎 久保田鼎 岡倉覺三

追て圖案手数料は大小疎密の區別ありて一定の標準なしと雖も世上圖按料の定格に關せざる限り總て實費を目途とする積りに有之各依頼者より

申込次第通知可致候

(明治二十四年十二月二十六日付『日本』)

○懸賞織物圖案 大日本織物協會ハ曩きに東京美術學校々友會と織物圖案懸賞出品の約束を結びたるが今度初めて協會員の依頼ありて古代織物女帯地意匠圖案を校友會へ求めたるより同校ハ之を繪畫專修科の生徒に附して出品せしめ技術奨勵の爲め優等者へハ織物協會より懸賞金を出さしむる筈なるが右ハ已に出來して同協會へ廻附したりと云ふ

(明治廿五年二月廿日『東京朝日新聞』)

## 7 松方伯爵銅像

松方正義銅像は高村光雲が木型製作主任を、岡崎雪声が鑄造主任を担当した。木型は本学芸術資料館に保存されている。銅像完成当時の新聞には左のような記事がある。

○東京美術學校の榮譽 東京美術學校に於て鑄造したる松方伯の銅像ハ同校鑄造科教師が擔當したるものだけありて至極の上出來なるに依り伯に於ても殊の外其の精巧なるを賞賛せられ居る由なるが過日宮中に候候して御座近く侍べりたる際東京美術學校ハ近年の設立にハ候へども職員の勉勵其の職に従事致せしより生徒の技術頗る進歩を來たし此頃に至り大に見るべき者ある哉承はりしが過日同校に於て鑄造したる正義の銅像を一見致し候ひしに其の手際ハ海外の鑄造家に一步を譲らざるのみ却て彼れを凌駕するの思ひあらしむる程にて候旨を奏上せられたることありしに兩三日前西四辻侍從ハ工藝學校の幹事小山健藏氏と美術學校に出張し同校教師生徒の成績に係る繪畫彫刻鑄造品等の内より精選したるも

のを携へ歸られたるが同校職員ハ賢き邊にて斯くも美術に御心を懸けさせらるゝハ有難きことなりとて何れも感涙を流し居ると云ふ

(明治二十四年十月九日『国会新聞』)

## 関連事項

### ① 官制 (東京美術学校)

#### ○官制

勅令第百三十七號全第四百四十一號抜抄(明治廿四年七月廿四日發布)

#### 東京美術学校

一東京美術学校ハ繪畫、彫刻、建築、及美術工藝ノ技術者又ハ普通

ノ圖畫教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

學校長	一人	奏任
教授	十一人	奏任
助教授	十人	判任
書記	五人	判任
技手	二人	判任

(『東京美術学校一覽從明治廿四年至明治廿五年』)

### ② 両大臣の楠公像視察

明治二十四年九月二十四日、松方総理大臣、大木文部大臣の一行が来校し、楠公銅像木型の製作を視察した。新聞はこれを次のように報じている。

#### ○両大臣楠公の彫像を視る

今度宮城正門前に建設になるべき楠公乗馬銅像の木彫原形楠公像

は有名なる彫刻家石川光明、高村光雲の兩氏が其像を後藤貞行氏が其馬を擔任にて既に其木取り丈け出来せしに付き松方総理大臣大木文部大臣は辻次官大島秘書官等を隨へ昨二十四日東京美術学校内の右彫刻場に臨み其の模様を檢視せり

(明治二十四年九月二十五日『東京新聞』)

### ③ 日本青年繪画協會の発足

明治二十四年十一月二十一日、上野公園桜ヶ岡日本美術協會列品館で日本青年繪画協會の発会式が行われ、岡倉校長は会頭に推戴された。同日より三日間、臨時研究会(二百余点を出品審査)も開かれた。当時の事務所は深川区清住町二十五番地川端玉章方である。

同会は川端玉章、川辺御橋門下その他の青年画家(三十歳以下)によつて結成されたもので、尾形月耕、寺崎広業、梶田半古、村田丹陵、山田敬中、小堀鞆音、福井江亭、島崎柳塲等々、本校以外にあつて岡倉校長の方針に共鳴し日本画革新の道を歩もうとする青年たちの道場となつた。同会の共進会は明治二十五年の第一回(十月十五日)三十一日、於本校々友会俱樂部)の後、毎年開かれたが、岡倉校長は褒賞授与式に臨み、作品評や演説を行うのが常であり、青年たちの指導に熱意を燃やした。同会の月次研究会では橋本雅邦、川端玉章、川崎千虎などを判者とする絵合えあひの催し(明治二十七年九月二十三日第一回)なども行われた。

### ④ 美術学校予備校 (美術講習所、共立美術学館)

東京美術学校の存在が一般に知られるにつれて志望者も増加し始